

## 館林キリスト教会 デボーションノート（2025年）

2月1日 今日に通読箇所 エペソ人への手紙 3：1～13  
「キリストの奥義」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/49EPE31.mp3>

パウロは1節で、「あなたがた異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となっている」と書いています。パウロが囚人となったのは、直接的には異邦人へ伝道した結果であって、カイザルの力に屈服した結果ではないのです。ですから13節で「あなたがたのためにわたしが受けている患難を見て、落胆しないでいてもらいたい。わたしの患難は、あなたがたの光栄なのである」と書いたのです。こうしてパウロは啓示によって知らされた奥義を彼らに明らかにしたのです。そのキリストの奥義とは、「異邦人が、福音によりキリスト・イエスにあつて、ユダヤ人たちと共に神の国をつぐ者となる」「両者がキリストを頭として1つからだになる」「両者が共に神の約束にあずかる」ということなのです。

2月2日 今日に通読箇所 エペソ人への手紙 3：14～21  
「パウロの祈り」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/49EPE32.mp3>

14節の「こういうわけで」は、1章から3章の部分の結論を受けた言葉です。ここでパウロは天地の創造者である神に2つの祈りをささげています。第一は「御霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強くしてくださるよう」で、第二は「キリストがあなたがたの心のうちに住み、あなたがたが愛に根ざし……また人知をはるかに越えたキリストの愛を知って、神に満ちているものすべてをもって、あなたがたを満たされるように」という祈りです。パウロはエペソのクリスチャンたちに、健康に気を配ると同様、いやそれ以上に、「内なる人」が強められるように、みことばに親しみ、祈りの時間を設け、主との交わりを期待しているのです。パウロがエペソの教会の牧師テモテにあてた手紙にはその有益性が書かれてあります。

2月3日 今日に通読箇所 エペソ人への手紙 4：1～16  
「健康な体」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/49EPE41.mp3>

健康な体は何の不調も違和もなく、ごく自然にバランスよく機能しています。健康な体が調和しているように、聖霊は教会に一致（調和）を与えてくださいました。パウロは1節～3節で「あなたがたに勧める」すなわち「あなたがたに懇願します…聖霊が与えてくださった一致（調和）を保ち続けるように熱心に努力しなさい。」と語ります。確かに全ては一つです。4節～6節のように、神様は唯お一人です。聖霊も、主キリストもお一人です。教会も信仰も望みも洗礼も、お一人の神様による一つのものであります。各々に与えられた賜物は様々です。しかしそれは、体の器官が仕え合っているように互いに仕え合い、教会の

頭であるキリストに仕えるためなのです。

2月4日 今日に通読箇所 エペソ人への手紙 4：17～32  
「新しき人」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/49EPE42.mp3>

ここは、クリスチャンと教会の成長に関わる勧めです。異教徒のように、あるいは神様を信じる以前のように生活してはいけません。イエス様が真理そのものですから彼に学びなさい。私たちの元の性質は、錯覚から生じる情欲によって腐敗してゆくものです。ですから元の性質を脱ぎ捨て、古い自己を捨て去りなさい。そして神様が与えてくださる新しい性質を着なさい。虚偽を捨て真実を語り、怒っても日の沈むまで続くことがあってはなりません。悪魔に余地を残してはいけませんから。勤勉に働き生計を立て貧しい人に与える者となり、悪い言葉を言わず人の徳を高め益になるように語り、聖霊を悲しませてはいけません。悪意を捨て何よりも神様が赦して下さったように互いに赦し合いなさい。

2月5日 今日に通読箇所 エペソ人への手紙 5：1～14  
「神にならって生きる」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/49EPE51.mp3>

1節には「神にならう者になりなさい」という勧めが書かれています。子供は親のしていることを真似て育ちます。人はよかれ悪しかれ周囲の影響を受けて成長します。ここでパウロは、積極的に「神にならう者になる」ために3つのことを勧めています。第一は、キリストが私たちを愛して十字架にかかれたことを覚えて生きることです。第二に、「光の子らしく歩みなさい」という勧めも同様です。神が光の中にいますように、私たちが世に光であるキリストを仰ぎつつ歩むなら、聖霊の働きによってキリストに似た者と変えられるからです。第三に、不品行や汚れや食欲、卑しい言葉と冗談を避けることです。誠実、純潔などが死語になりつつある現代、私たちに対する重要な勧めだと思えます。

2月6日 今日に通読箇所 エペソ人への手紙 5：15～21  
「賢い者のよう生きる」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/49EPE52.mp3>

15節には「賢い者のように歩みなさい」という勧めがあります。これは1節の「神にならって生きる」と同じ勧めです。パウロが「賢い者」と言っているのは、ギリシャ人の知恵と言われるようなこの世的な知恵ではなく、神の知恵、上からの知恵のことです。ですから「賢い者のように歩む」とは、キリストの福音にふさわしく生活することです。そのためには、今の時を生かして用い、主の御旨をわきまえ、御霊に満たされて歩いていくようにすることです。パウロの時代も悪い時代でしたが、今も同様です。だから悪い時代であっても、いたずらに嘆き眩くのではなく、これをチャンスと見、生かしていくことが大事です。エペソ人への手紙は、パウロがそれを身をもって示した獄中での書簡です。

2月7日 今日に通読箇所 エペソ人への手紙 5：22～33  
「夫と妻」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/49EPE53.mp3>

22節～6章9節は、いろいろな立場の人への勧めです。神様は人間関係において特定の秩序を制定されました。キリストが教会のかしらであるように、夫は妻のかしらです(23節)。まず「妻」への勧めです。教会がキリストに仕えるように「妻」はかしらである夫を「尊敬」し(33節)、「仕える」こと(22節)。尊敬とは、彼を大切にし、尊重し、服従し、窮みまで愛する意味が込められています。次に「夫」への勧めです。「夫」は妻を支配するのではなく、キリストが教会を愛してご自身をささげられたように、妻を「愛しなさい」と三度記されています(25節他)。この愛と尊敬の標準は非常に高いのです。キリストが教会を愛する「愛の模範」が掲げられているのは幸いです。神様は、夫と妻の愛と一致の関係を示して、キリストと教会の関係を分り易く、行き届いて啓示されました。

2月8日 今日に通読箇所 エペソ人への手紙 6：1～9  
「両親と子供」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/49EPE61.mp3>

十戒の第五戒に、両親に従う戒めと、それに伴う祝福の約束が記されています。その十戒に基づいての勧めです。両親に従うことは正しいことである。なぜなら、神様は両親にその子供の養育をお任せになったからです。子供が両親に従うのは、神様に従うことに繋がるのです。「これは主に喜ばれることである」(コロサイ人への手紙3章20節)ともあります。しかし「主にあって」とあるように、親子とも主のみこころが第一であることも記されています。両親は「子供をおこらせないで」「子供をいらだたせてはいけない」(コロサイ人への手紙3章21節)主の薫陶(香の香りを染み込ませ陶器を焼くことから、徳をもって人を感化すること)と教え、諭し、時には戒め、育てることが勧められています。

2月9日 今日に通読箇所 エペソ人への手紙 6：10～24  
「クリスチャンの戦い」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/49EPE62.mp3>

12節でパウロが「わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、天上にいる悪の霊に対する戦いである」と記したように、クリスチャンの戦う相手は人間ではなく、その背後の悪魔です。英語の聖書で「戦い」が「レスリングをする」となっているのは、この戦いが取っ組み合いの汗みどろ血みどろの格闘だからでしょう。ですから、この熾烈な戦いに対抗するために、神の武具を身に着けなさいと命じたのです。そして具体的には、当時の兵士の装備を描写し「真理の帯びを腰にしめ、正義の胸当てを胸につけ、平和の福音の備えを足にはき、信仰のたてを手に取り、救いのかぶとをかぶり、御霊の剣、即ち、神の言を取りなさい」と言ったのです。

2月10日 今日の通読箇所 列王紀上 1章1～27

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/111RETU011.mp3>

ソロモンがダビデ王の後継者であることは、以前から神様によって示されていた。またダビデはもとより、王宮の霊的指導者ナタンや、その他多くの指導的な人々の承知し支持していたことであった。これに対し、ソロモンの兄であるアドニヤは、自分がソロモンをしのいで王位につこうと野心を超し、同じく野心の多い人たちの、支持を取り付け、手兵を養うなど次第に準備していたが、とうとうエンロゲルに結集して氣勢をあげた。「アドニヤ王即位」という既製事実を作り、もれを老年のダビデ王、年少のソロモンに押しつけ、いやおうなしに認めさせようとするのである。

2月11日 今日の通読箇所 列王紀上 1章32～53

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/111RETU012.mp3>

ダビデ王、ナタンたちは、ソロモンが王の後継者であることを今まで、公式には布告してなかった。しかしこの状況の中で、今いそいでソロモン王即位の布告を行うことになった。その結果、神様の示し、ダビデ王の指名、ザドク、ナタン、ベナヤらの支持賛成が明白なので、全国民もこぞってソロモン王を承認歓迎することになったのである。ここにアドニヤ一味は離散し、アドニヤ自身はソロモンの前に平伏して、命乞いをするはめになった。ソロモン王即位という祝日であったから、今はソロモンが寛容を示し、一応アドニヤを許したのは良いことだった。

2月12日 今日の通読箇所 列王紀上 2章1～12

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/111RETU021.mp3>

勇王ダビデも静かに老い、今や「すべて父の行く道」すなわち死の道につかんとする。死は万人の逃れぬ運命である。それ故我々も常に「神に会うそなえ」を全うしていなければならない。ダビデはソロモンに与えた遺言の中で、信仰の勇気と、聖書に対する従順を教えている。それと共に、ヨアブ、バルジライ、シメイなど、問題の多い家来たちの処分を命じた。ダビデは寛容と忍耐の間に長く彼らを観察したが、その結果、彼らの本性は遂に変らぬものと見込んだからである。事実それは次第に明らかになって来る。

2月13日 今日の通読箇所 列王紀上 2章13～35

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/111RETU022.mp3>

ダビデもソロモンも、寛容に人の罪を許し見逃したが、人によっては恵に慣れ、かえって王の裁きをあなどり、性こりもなく同じやり口をくりかえすケースがある。今は手も足も出ないアドニヤがバテシバに願って、ダビデ王晩年の妾アビシャグを求めたのは、これによせて、他日自分こそ実はダビデ王の真の後継者だったのだと、主張するための準備工作なのである。バテシバは気がつかないが、ソロモンの目はごまかせない。しかも、アドニヤの背後には、例のヨアブ、アビヤタルらの策謀、指導があることも察したから、かくてアドニヤ、ヨアブの処刑、アビヤタルらの追放ということになった。

2月14日 今日の通読箇所 列王紀上 2章36～46

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/111RETU023.mp3>

シメイはアブサロムの乱の時に都落ちするダビデを呪った。乱が平定したのち「シメイなど殺してシメイ」という家来たちをなだめて、ダビデは彼を許した。ダビデが遺言の中でその処置を命じたのは、その後もよほどシメイの態度が悪かったからだろう。ソロモンはシメイに改めて警告を与え、謹慎を命じた。好意につけ上るのは小人の特徴で、3年後、彼は不用意に謹慎の命令を破り、処刑されることになった。神に対しても人に対しても、甘えつけ上るのは良くない。

2月15日 今日の通読箇所 列王紀上 3章1～15

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/111RETU031.mp3>

若年にして王位についたソロモン王には、二つの思いがあったに違いない。一つは、神と民に対する重大な責任感の緊張と恐れであり、他の一つは、絶大な地位にとまなう権力の自覚、また富貴、快楽、領土拡張、戦争などの野心である。しかしソロモンの場合、前者の真剣な責任感が強く、いま後者を考えるいとまがなかった。その彼の祈りが神のみ心にかない、神は彼の祈りに答えて王様の知恵を約束しただけでなく、それ以外のものすべて賜物として与えられることも約束された。本当に「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」との言葉の通りである。

2月16日 今日の通読箇所 列王紀上 3章16～28

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/111RETU032.mp3>

このソロモンの裁判の話は有名で、いろいろに形を変えて世界中の「名裁判官物語」に出て来る。ソロモンがここで本当の母親を見分けたのは、「細かい証拠調べや理屈よりも、本当の母親の持っている「愛」、を調べたのだ。子供にとっては、何よりも「愛」のある母親に育てられるのが一番幸福なので「実の親かどうか」という問題さえ、案外二の次ぎであるかも知れない。キリストが「親切なサマリヤ人」の話の中で「だれがこの人の真の隣人だったか」とおっしゃったのも、同じ意味だと思う。神様の人間に対する評価も、細かい成績調べでなく「愛」を標準になさるに違いない。

2月17日 今日の通読箇所 列王紀上 4章 1～21

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/111RETU041.mp3>

2月18日 今日の通読箇所 列王紀上 4章22～34  
列王紀上 4章

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/111RETU042.mp3>

1節から6節までは、ソロモン王宮廷の中央の高官たち、7節以下は地方官である。国威大いにあがり、諸外国の朝貢品が続々と集って来る。国は富み、民は栄え、ソロモンの王宮も繁栄を通りこして、少しぜいたくになってきた様子も見える。26節以下には軍備充実の様子も見えるが、何と言っても29節以

下に記された、知恵と学問がソロモン王のご自慢で、その範囲は、哲学、文学、自然科学に及んだ。そして彼は諸外国の王たちにとっても国政と学識の指導者として仰がれていた。

2月19日 今日に通読箇所 列王紀上 5章

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/111RETU051.mp3>

さていよいよソロモンは、父王ダビデ以来の念願だった神殿建築に取りかかることになった。イスラエルには大きな木材が出ないので、北方の国ツロから買い入れることとし、木造建築の技術者もいないので、これもツロから招かねばならなかった。そのかわりイスラエルは豊富な食糧をツロに輸出した。この取引契約も、神の祝福とツロの王ヒラムの好意で順調に行われた。結局20万人近い技術者労働者がこの工事に協力して働いた。とにかく大変な事業だった。

2月20日 今日に通読箇所 列王紀上 6章 1～22

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/111RETU061.mp3>

2月21日 今日に通読箇所 列王紀上 6章 23～38

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/111RETU062.mp3>

2月22日 今日に通読箇所 列王紀上 7章 1～22

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/111RETU071.mp3>

2月23日 今日に通読箇所 列王紀上 7章 23～51

列王紀上 6章、7章

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/111RETU072.mp3>

ここはソロモン王の、神殿および宮殿建築の記事だが、記事は詳細にわたり、まるで文字で書いた設計図のようだ。昔テントを張って砂漠を移動していた先祖のころと違って、イスラエル人の生活も安定と繁栄の時代に入ったので、今、国力を傾けてりっぱな神殿を建てたのは、神に対する、ソロモン王と人々の、まごころと熱心のあらわれだった。我々も、自分たちの受けているそれぞれ恵みに従い、まごころと熱意をもって神に仕えたいものである。

2月24日 今日に通読箇所 列王紀上 8章 22～34

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/111RETU081.mp3>

いよいよ神殿が完成した時、盛大な感謝会、祝賀会が開かれたが、一番大切だったのは、この神殿をきよめて神に献げる、献堂式だった。この章には、献堂式におけるソロモンの祈りが記してある。この祈りを読むと、神殿はたしかに「祈りの家」であって、ソロモンはこれから神殿に、個人の祈り、民族の祈り、悔い改めの祈り、祝福の祈りが、また収穫の感謝の祈りも、戦争の助けの祈りも、ささげられることを期待し、神が天からその祈りに答えて下さるように、願っているのである。

2月25日 今日に通読箇所 列王紀上 8章 35～45

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/111RETU082.mp3>

ソロモン王の、献堂式の祈りがつづく。彼は今、念願の大事業を完成して、誇りと満足の絶頂のはずなのに、その祈りの態度の謙虚さには心打たれるのである。彼は王者でありながら、人間はすべて、彼をも含めて、罪多く、しかも災害の多い世に住むものであることを深く自覚している。それ故、民が悔い改める時はその罪を許し、災害や戦争の時に祈ったならば、救って下さるようくりかえし祈っている。これを思えば、祈らずに生きようとする者の傲慢さが、つくづくと思われるのである。

2月26日 今日を通読箇所 列王紀上 8章46～53

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/111RETU083.mp3>

やがて彼らの子孫の国ユダヤは、重ね重ねの神に対する反逆のために、祝福を失い罪の罰をうけて、BC600年に滅亡する。人々は捕虜としてバビロンに強制移住させられるが、真剣な悔い改めの結果、50年後に帰国して、再びユダヤ国を建てることを許される。次に同じ事情のもとに、AD70年ローマのために滅ぼされ、以後二千年間、ユダヤ人は亡国の民として世界中に離散していた。しかるに第2次世界大戦後、次第に故国パレスチナに帰還した彼らは、1948年、三度イスラエル共和国を建国して今日に至っている。その亡国はいつも彼らの罪の結果であるが、その民族の保護と国の回復は、歴史における奇蹟であって、ソロモンの祈りの答えであると言える。

2月27日 今日を通読箇所 列王紀上 8章54～66

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/111RETU084.mp3>

神の言葉である聖書に対して、選り好みをするわけではないが、特に折りあるごとに繰り返して読みたい所があるのも事実だ。王上8章のソロモンの祈りなども、時々読み味わうことをおすすめする。大切な祈りのお手本の一つだからである。今までひざまずいて祈っていたソロモンが、今度立ち上ると、全国民を祝福する。人々のためにとりなしの祈りをささげ、一つまた立ち上って人々を指導する。これは王者、牧師、一家の父親など、上に立つ者の大切なつとめなのだ。

2月28日 今日を通読箇所 列王紀上 9章1～14

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/111RETU091.mp3>

世にソロモンほど幸運な者はいまい。父王ダビデは、神の恵みに支えられたとは言え、一介の牧童から身を起して国王となるには、たゆみない努力と経営をかさね、多くの苦勞と危険とをしのいだのである。しかるにソロモンは生れながらの王者であった。しかし与えられる物が多ければ、それだけ期待される責任も重い。神がソロモンの祈りに答えて下さるとともに、今改めてソロモンに命じ、神の前に心と生活を全うして、つつしんで与えられた王者のつとめを果たせよ。と仰せられたのは、真に至当なことであった。